宮城県

東北大学 青葉山東キャンパス センタースクエア「中央棟」

TOHOKU UNIVERSITY AOBAYAMA EAST CAMPUS CENTER SQUARE

建築設計：山本・堀アーキテクツ、家具設計：藤江和子アトリエ

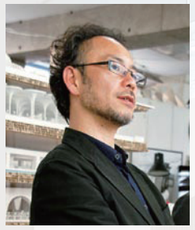
尾根の自然に呼応した大学生活の核となる居場所づくり。

東北大学工学研究科がある青葉山東キャンパスでは、マスタープランに基づいた大きなキャンパス再編が行われている。その一環として、大学生活を支える憩いの場であり中核的な拠点にもなるよう、緑豊かな青葉山に調和するセンタースクエアが新設された。センタースクエアは、中央棟とブックカフェ棟と広場から成り、厚生施設、講義室、工学研究科事務局等が設置されている。
そういった施設の中から、中央棟にある食堂および憩いの場に焦点をあててみる。どのように学生の居場所を創出したのか、プロポーザルコンペで採用となった建築の山本・堀アーキテクツと、家具の藤江和子アトリエの皆さんから話しをうかがった。

TALK

山本・堀アーキテクツ

建築家
堀　啓二氏



建築家
地引重巳氏

藤江和子アトリエ

デザイナー
藤江和子氏

デザイナー
野崎みどり氏

中央棟の役割と自然環境を、的確に読み込んだ建築計画。

2007年に実施された プロポーザルコンペの背景は？

堀　センタースクエアの建設予定地には以前から広場があり、食堂棟が建っていましたが、老朽化により厚生施設としては厳しい状況でした。キャンパスの核となる新たな厚生施設をつくるには、職員、教員、学生が一体となって進める必要があるということで、工学研究科の小野田泰明教授を中心に「センタースクエアプロジェクト」が創設されました。そして学外から“建築力を得る”ために、プロポーザルが行われたのです。

プロジェクトメンバーが米国の大学を視察した際に、「学生が、同等レベルの大学を選ぶ条件は2つあり、厚生施設が充実していること、及び、外観・外構や一見した内部の雰囲気が良いことである」と聞いたそうです。そういった経緯から、学生が創造的に教育・研究に取り組む上での厚生施設の重要性や、建築計画と共に外構や家具計画を進める必要性が、プロポーザル資料に記されたのです。

青葉山東キャンパス。中央がセンタースクエア。

尾根の自然に呼応した
大学生活の核となる居場所づくり。

一方で、このキャンパスの西側に新キャンパスおよび地下鉄の新駅ができる予定があり、将来はセンタースクエアの地区がキャンパスモールとして表玄関になると予測されます。同時にモールの中心施設整備も計画され、学生の居場所となる食堂や生協などの厚生施設が建設されることになりました。

さらに、学会などが開ける講堂や、工学部の決定機関である教授会や事務局の施設も入ることになり、多様な機能を併せ持つ中央棟の計画が出来上がっていったのです。

センタースクエアをどう捉え、どのような提案をされたのでしょうか？

堀　建設予定地を下見に行ったのですが、青葉山という丘陵地には尾根沿いの環境が残り、アカマツの疎林があちこちにあったのですね。それを見て昔の尾根の雰囲気を再生しようと考え、どういう建築がそれに一番合うかという視点から、構想をスタートさせました。尾根ですから北側と南側の植生に違いがあり、両方とも生かせるように計画を進めました。

地引　他に重視したことが、居ながらの建て替えです。以前あった食堂棟では、食堂と販売・書籍コーナーがほぼ半々のスペースを取っていました。最初にブックカフェ棟を作り、販売と書籍を移動した後に半分を壊しました。残った食堂を使いながら、その横に中央棟を建設したのです。

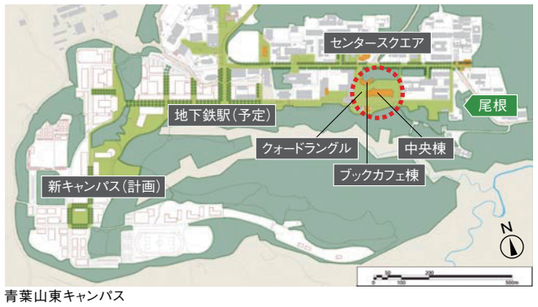
センタースクエアプロジェクトによる調査や意見は、建築に反映されましたか？

地引　要項には、中央棟の食堂の広さや席数など以外に、あまり細かい規定はありませんでした。お茶を楽しみながら本が読めるブックカフェは、国内にはあまり例が無く、国立大学系では初めての試みでした。小野田先生がアメリカ滞在中にご覧になったイェール大学のブックカフェが、スマートな印象として残っておられたようです。

工学研究科の学生からは、授業をうける場所はあるが、授業の終了後に自習したりくつろいだりする場がないので困るという声が。また先生からは、お客さんが来ても居てもらう場がなく、研究をする立場として良くないという声があり、それらも併せて実現することになりました。

堀　周りの建物との関係づくりに、クォードラングル※という場を設けました。センタースクエアとその南側にある同窓会館、そして、いずれ医工学研究科棟になる西側の事務棟に囲まれた、アカマツと芝生のある季節が感じられる場です。また中央棟はキャンパスの中心に位置し、工学研究科のほとんどの学生と先生が集まってきますので、入りやすいよう南北面を開放しています。

※クォードラングル：回廊や建築物で囲まれた中庭で、交流のための場。



青葉山東キャンパス

建築と家具が協働して創り出した、気持ちよい居場所。

居場所としての、建築や家具デザインの基本的な考え方は？

堀　構造的には東西の両端に、大講義室と大会議室という閉じた空間を設け、そこに耐震など構造的な要素を集約しています。中央部は、スレンダーなPC柱列で支えられている、開いた2層吹き抜けの大空間を創出しました。ここには、「あおば食堂」をはじめ3つの食堂やフードコート、クイックコーナーなどが入っています。全体で600席確保したいという大学の要望に対して、569席を確保しました。北側の広場に面して2層吹き抜けのロッジア※を設け、学生たちの移動による空間の活性化をねらいました。

※ロッジア：ファサードに面して配された回廊状の空間。

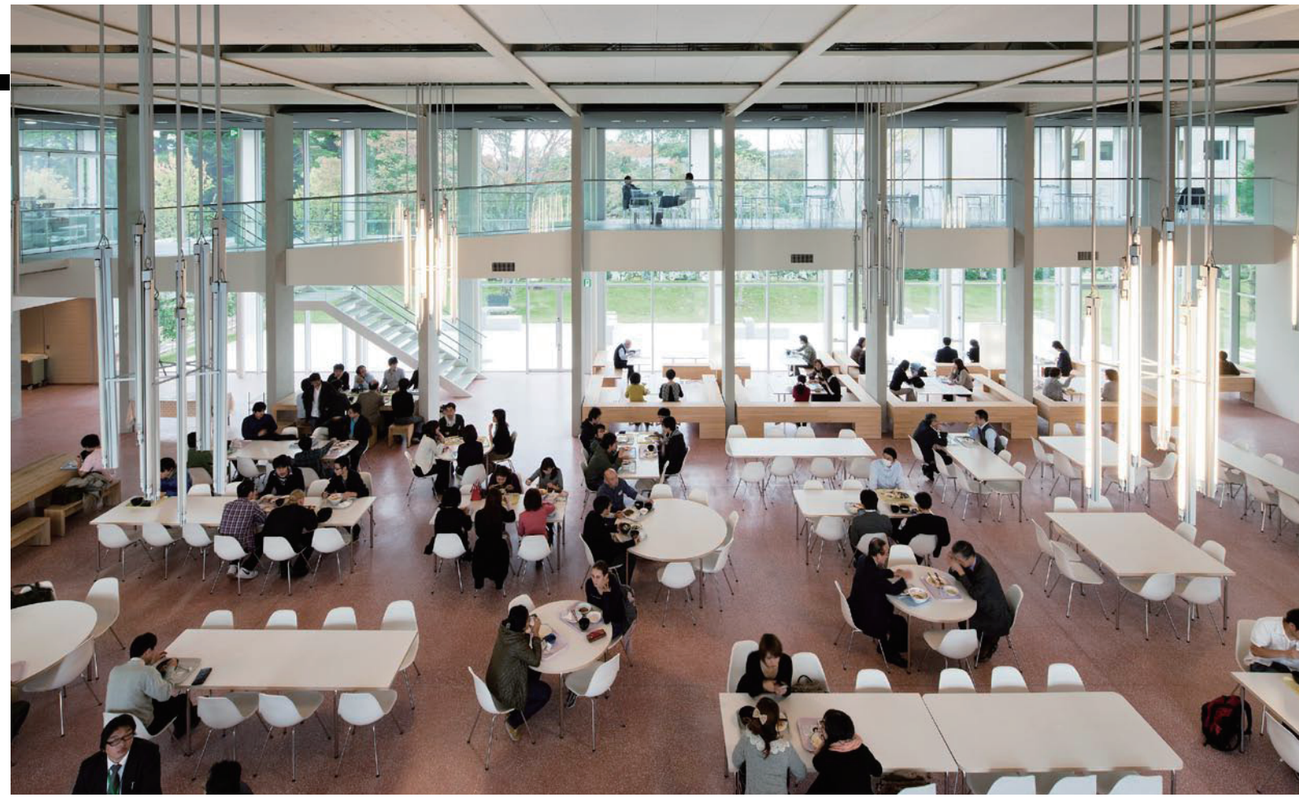
藤江　建築プランが練られている間に、私たちは先ず、工学系の学生や先生たちが過ごす日頃のシーンについて考えていました。研究は昼夜を問わず続けられているので、例えば夜中に、学生や先生たちが研究の合間にここへ来た時、どのようにくつろげるといいだろうか、朝日をうけて過ごす時間はどうあったらいいだろうか…と。また東北大学ともなれば、海外からのお客様も多いと思われます。そういった方たちにどのような印象を持ってもらえるといいかなど、様々なシーンを想定したイメージづくりにずいぶん時間を割きました。中央棟の設計が具体的になっていく間に、家具のありかたも具体的になっていきました。こうして実現化していく際に、建築空間との関係や周辺環境との関係など、イメージづくりの間に考えた当初のきっかけが、形を変えて生きてくるんですね。

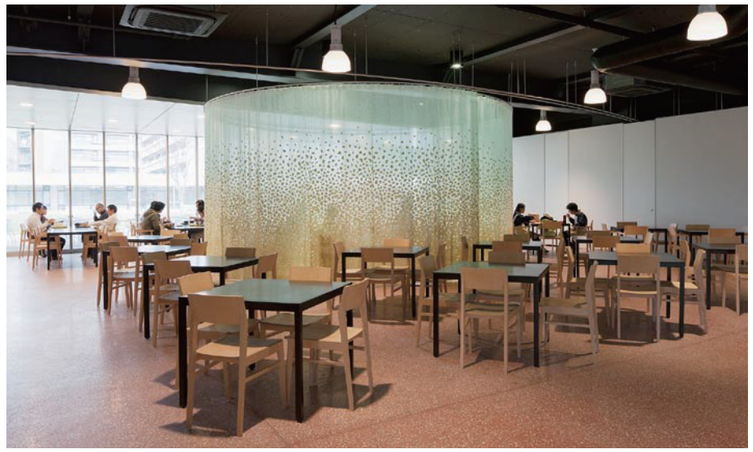
具体的には、どのような居場所が創り出されたのですか？

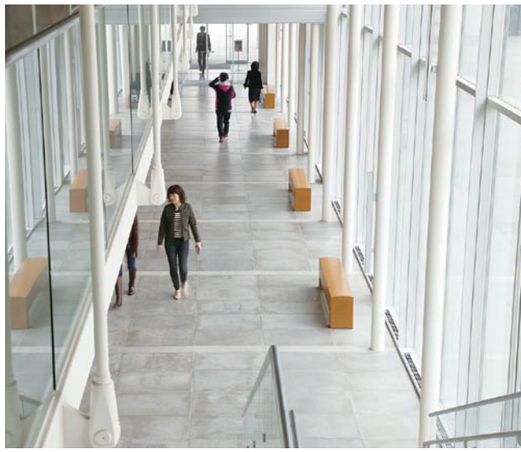
野崎　私たちは、長い食堂空間の途中に拠点をひとつ作りたいと考え、ダイニング「DOCK」を提案しました。DOCKは多様な使い方ができ、カーテンで部屋を仕切れば小さな会が催せますし、開ければ外と一体化した使い方も可能です。

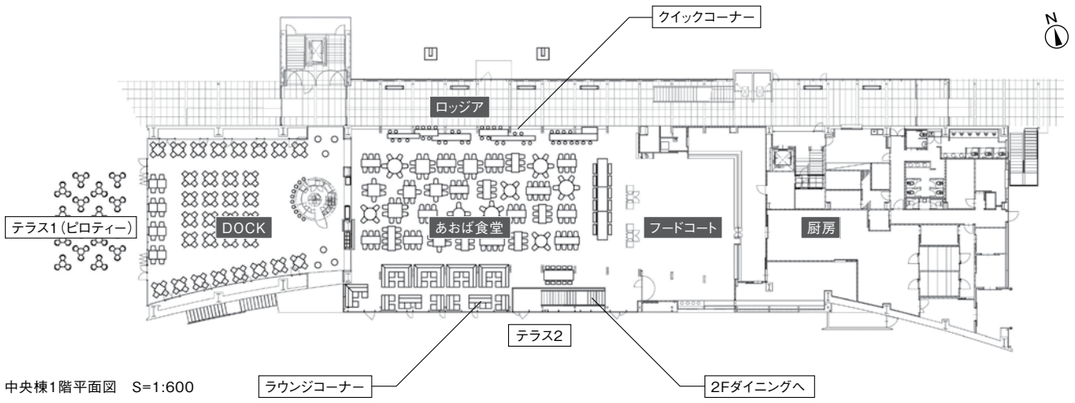
また、学生にもっと開放するよう大学に働きかけました。例えば金曜日の夜はパーティーなど自由に使わせるとか…。

地引　建築的にも、あおば食堂の開放感ある空間に対して、DOCKは天井部分を抑えて落ち着きのある空間にするなど、家具計画に合わせた配慮をしています。


様々な居場所がある食堂空間。


DOCK／特注テーブル・イス　多様に使えるダイニング。


ロッジア／特注ベンチ



中央棟1階平面図　S=1:600

TOHOKU UNIVERSITY AOBAYAMA EAST CAMPUS CENTER SQUARE

尾根の自然に呼応した
大学生活の核となる居場所づくり。

藤江　この建物内で一番大事な食堂空間を、賑わう昼食時だけでなく、交流、勉強、くつろぎなど様々な用途に一日中使ってほしいので、居方のちがういくつもの場づくりをしています。また、人の活動を促進する「動かせる家具」と、人の動きを制御する「動かせない家具」を家具配置計画の骨格としました。動く家具を自由に組み替えることで新しい活動が生まれますよね。

大テーブル／特注テーブル・イス

クイックカウンター

例えばフードコートとあおば食堂の間にある長さ8m超の大テーブルやロッジアに添って柱を縫うようにあるクイックカウンターは、動かない家具です。家具には、どっしりとした不動の安心感も必要で、東北の地元材を大らかに使っています。また、建築専攻の学生もいますから、本物の材料を特質が伝わるような方法で体験させることも大事です。ホワイトアッシュやカラマツなど無垢の木材を使用していますが、素地仕上げにしてその感触が分かるようにしました。

一方、あおば食堂の家具は大きさも形も様々な動く家具で、人数や用途によって自由にレイアウトを変えられます。家具のしつらえは、シンプルで機能的にしました。

地引　2階の回廊から見下ろすあおば食堂の様子はおもしろいですよ。学生達は家具を自由に動かして使っています。

堀　ここは、春から秋にかけては、とても気持ちのいい場所ですから、環境を含めた建築計画が生きてきます。中央棟やブックカフェのテラス、クォードラングルなど半屋外空間が活用されることを期待したいですね。

あおば食堂／特注テーブル、輸入イス

藤江　私たちも、様々な規模のパーティーが催せるような、室内と一体使用ができる半屋外空間を作ってほしいと、建築へ度々お願いしました。南側テラスへの開口部も増やしていただき、それに合わせて家具配置も調整しています。

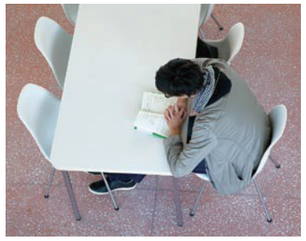
地引　プロポーザル時から提案していましたが、片持ち梁下のピロティー空間やテラスなどの半屋外空間を積極的に設けました。あおば食堂とDOCKの間仕切りには建築的な仕掛けがしてあり、通常は開いていますが、用途に合わせて空間が仕切れるようになっています。

ピロティー：室内と一体使用できる片持ち梁下の空間。

藤江　また、広い面積を占める床の色と素材は、建築にも家具にも重要です。ここで過ごした学生は、この特徴的な床を記憶に刻んでずっと覚えていてくれるのではないでしょうか。

地引　床は、食事とくつろぎの場にふさわしい赤系の暖かい色が良いのではないかと考えました。材質は、コンクリートに色粉と骨材を入れて打ち、現場で研ぎ出したもので、現場研ぎ出しテラゾーと呼ばれており、ほとんど目地が無く、タフで素材感があります。

堀　他に、「溜まりの空間」として、中空に浮いたようなカフェを2階南側の回廊に設けました。対称的に、反対側にある2階北側の回廊は「通過する空間」です。キャンパスでは、人の動きが活性化につながりますからね。



藤江　「溜まりの空間」のポイントは、手すりも家具も透明なことで、空間を楽しみ時間を過ごす人々の生きている仕草や様が浮きでてみえてくるんですよ。

堀　こうして中央棟が出来上がった矢先に、東日本大震災が起きてしまいました。しかし、この建物や家具は無事で、キャンパス内の避難所として使われていたようです。大学の評価はこれからですが、施設として信頼していただけたのではないかと思います。

地引　大学キャンパスにおいて本当に創造的な研究をするには、街のような遊びの場や溜まりの場も必要となるのではないでしょうか。

藤江　人間の日常は単純ではなく重層的ですから、建物にも様々な居場所が必要です。大学が私たちの考えを理解し受け入れて下さったから実現したのですね。そして震災時には、多くの学生や教職員が身を寄せ合い「みんなのいえ」として機能したと知り、本当に良かったと思っています。

ラウンジコーナー／特注ベンチ・テーブル
ベンチはパソコンが使え、荷物も置ける。

クイックカウンター／特注カウンター・スツール
気軽に立ち寄れる、パーソナルな居場所。

南側2階のカフェコーナー／特注テーブル、輸入イス
透明な空間が楽しめる。

ロッジア／特注ベンチ

テラス／特注ベンチ